ず知らずのうちに同化していった。そこにおいて、私が作品を分析し、主人公、更に作者に対した時、自分と同次元における生き方の問題としてとらえてしまった。小説を人生の再現として、自己との葛藤においてとらえようとしたのである。この方法は一読者として、言いたい事を言っている時は、極めて明確におもしろい分析ができる。しかし、これがいざ卒論の方法にと持ってきた時、自分のすべての半生及び人生観を語り尽くさねば、作品、作家を解釈しきれないという自分の方法がおそまつに感じられた。自分自身をピエロにして人前にさらすのが愚かしく思われ、自分がいとおしくなってしまったのである。基本的姿勢が、四年になって疑問になりだしたらもういけない。とても落着いて、資料集めなどできるものではない。更に題が悪い。

森鷗外論―『舞姫』における〈恨み〉の内実をめぐって―どうもこの「恨み」という物は、いやらしいもので、豊太郎の相沢を憎む心―豊太郎の非人間的な自己の行為に対する恨み―作者が官僚機構の中にひたりきれない心の痛みとたどっていくと、更に自分自身へとはねっ返ってしまうのである。この「恨み」を鷗外の文学とのかかわり合いの原点にすえると、その「恨み」の持つ根深さ、大きさに、作品と共に私自身が揺れてしまったのである。

結局、卒論をこんな形でしか書けなかったという自分自身の半生に対する「恨み」を残して卒論が存在してしまった。私の青春が中途半端であったように、我が卒論も、銷しきれないものを残して存在してしまったのである。

文学を模索するというのは、怖ろしいことである。

〈新美南吉の童話の世界〉

第四回卒業　屋辺　葉子

振り返ってみると一年前の今頃は、下書きをまとめ丁度清書の段階に入ろうとしてた時ではないかと思う。私事になるが、私は昨年の十一月十八日に急性盲腸炎になり、十八日間も入院した。十一月になっても卒論の方が少しも捗どっておらず、その上、病院生活で、ベッドの上で気持ちはあせってイライラするばかり、「その本人にしかわからない」とよく人が何かの折りにつけて言う言葉が、この時こそぴったりとあてはまったと言っても良いと思う位、勉強のことで冷汗をかいたことも少ない。卒論に関する思い出と聞かれたらまず、何よりも最初にこのことが頭に浮かんできてしまう。

卒論自体のことでは、苦労したという印象が一番強い。というのは、自分の勉強したいものをある程度の方針を決め、三年のゼミから復習すれば卒論を書くにしても比較的楽であると思うが、私は全く関係のないジャンルを取り扱ったのである。童話がすきであるという理由から児童文学を選び、誰にしようなどと迷いながら作家と作品を決めたのが四月をすぎて大変遅かった。それに、児童文学と一口で言ってもジャンルは広いし、又私の選んだ新美南吉は若くして亡くなった作家で、死後少しづつ知られる様になった人でもあったので、文献や研究者が少なく参考になるものがあまりなくて困った。このようなことばかり書いていると卒論に関して全く良いことがなかったように思われるが、しかし、今になって考えてみると卒

論をやって本当に良かったと思う。というのは、確かに苦しかったし、提出した時点ではこれも書きたりない、あそこはこういう風に書けば良かったのではないかという風に自分では不満足のまま提出したが、一つの形を出したという点で良かったと思うのである。一つのことに対して一年間取り組んだのは一生のうちに何度もあることではないし、例えあまり勉強しなかったにせよ卒論を書く為に色々な図書館や文学館へ通ったこともはじめてである。最初は文献一つ調べるにも方法がわからずまごついたが、これをきっかけとして参考書の使い方、調べ方などを知ることが出来、勉強の仕方がわかってきたような気がする。一年間で卒論という一つの形で研究（大袈裟な言い方であるが）の過程を提出したが、これはあくまでも自分の選んだテーマのここが勉強の始まりであるということを認識出来た。この点が一番良かったことである。私の場合、単純な理由からテーマを決めたが、今はそれが自分自身のためにこれから先も童話のことについて少しづつ勉強していきたいという気持ちである。こう考えられるようになったのは、一年間卒論と取り組んだ結果からであるから、例え内容は貧弱であれ、卒論を書いて一つのきっかけをつかめたことを嬉しく思う。

※　※　※

〈20ページからつづく〉

のみ文学として成立しているかに見られている。軽井沢が何だというのだろう。サナトリウムが何だというのだろう。一つのパトスが言い得ているなら、一つの美がそこにあるなら、それで良いではないか。泥まみれの人生も、高原で営まれた人生も、すべては天が人間という生物に与えた短い時の流れ、時は、平等に、今日から明日へとよどみなく流れている。人間は、その中で、「器の中の水が揺れないやうに、／器を持ち運ぶ」だけ、モーションの大きさにも所詮限りがある訳だ。雄々しく歌われているこの詩の裏に、はてしない詩人の不安を私は見出す。そして、更に、作家の意識の流れを追おうとする時、コミュニケーションの空しさを感じ、はては言葉というもののむずかしさに行きあたらないわけにはゆかない。

今は、ただただ、「謙抑にして神恵を」待つばかりである。